紅水晶の戦い

有沢　美弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅水晶の戦い

【Ｎコード】
Ｎ７２１７Ｅ

【作者名】
有沢　美弥

【あらすじ】
以前、無事に戦いを終えた箕夜は愛糯の侍女となり暮らしていた。しかし、国に大きな問題が発生し！？

第一章

「えぇっ！？！？」
愛奈(あいな)の部屋に、美夜(みや)の声が響く。
「美夜…反応大きすぎですよ」
愛奈に制され、我にかえる。
「でも…」
美夜はそれでも、あわてふためく。
「良い報せではありませんか。ねぇ、麻癒(まゆ)」
麻癒は頬を赤らめる。

麻癒が子供を身篭った。
むろん、汰奈(たな)の騎士団長との子だ。
さすがに夫婦ばらばらと言うわけにもいかないので、麻癒は汰奈に行く事になった。
「しっかしなぁ…」
美夜は少し呆れ顔になる。
「な…何…？」
麻癒がたじろぐと、美夜はニッ、と笑った。
「元気な子を産みなさいよ」
「わ…分かってます…」
それでは、と言って麻癒は部屋から出て行った。
部屋には美夜と愛奈が残された。
「……」
気まずい沈黙が続く。
「美夜は…」

先に口を開いたのは愛奈だった。
「は…？」
「美夜は結婚しないのですか？」
美夜は大きくため息をついた。
「媛…そっくりそのままお返し致します」
「冗談ですよ」
愛奈が手を軽く振ってみせる。
「秋王（あき）とはいかがなもので？」
美夜が質問すると、運悪く部屋の戸が叩かれた。
「はい？」
愛奈は美夜に確認するように促した。
「どちらさま…？」
戸を開けるとそこには蹂（じゅう）が立っていた。
「よ、久しぶりだな」
「…何しに来たのよ」
美夜はいかにも嫌そうな顔で言った。
「まぁまぁ…怒るなって。愛奈様に報告だよ」
蹂はそう言って部屋に入って来た。
美夜は先月、軍から抜けた。
理由は嶺国の裏切り。
裏切りの代償として、美夜は二度と戦場には出れなくなった。
代わりに、愛奈の護衛に回った。
「報告とは何でしょう」
愛奈は穏やかな顔で言った。
「愛奈様。突然で申し訳ないのですが、今すぐに国会に参加くださるようにとの事です」
蹂は深く頭を垂れた。
「分かりました。美夜、沙菜を呼んで下さい」
美夜は沙菜を呼んだ後で、蹂と共に中庭に出た。
「一体何があったと言うの？」

「梁(やな)国を知っているか？」
聞き慣れない言葉に、美夜は復唱した。
「やな……？分からない…」
「ああ。俺も初めて聞いた…しかし、嶺(りょう)国より少し小さいくらいで、実質的にはかなりデカイ国らしい」
美夜は些か驚いた。
なぜならば、嶺国は揮熬(きいる)国との戦で勝利し、更に国土を広げたのだった。
「それで…？」
「梁国は、我が国と同盟を結びたいらしい」
美夜の表情が一瞬にして強張る。
「本当か？」
一変して美夜の口調が変わった。
それは、かつての武士の血が濃く残っているからであろう。
「ああ。しかも、軍隊の数も相当なものらしい」
そこで、二人は口を閉ざした。
また戦になるのか…？
美夜はそう考えていた。
しかし、自分はもう戦場に出る事は許されない。
そうと分かっていても刀を握りたくなってしまう。
「美夜…」
最初に口を開いたのは蹂だった。
「何？」
「軍に戻りたいか…？」
「！？」
蹂の言葉は決定的なものであった。
美夜は口元を歪めた。
「戻りたくない訳はない…でも、私のしたことは事実として永遠に残る…それに…」
一度目を伏せてから、蹂の方を見て微笑んだ。

「愛奈様を放っておけないし」
蹂は口元を緩めた。
「そうだな…」
そう言った美夜の気持ちを蹂は知っていたから…
無理矢理笑った美夜に何と声をかけたらよいか分からなかった。
『残酷だな…』
蹂は一人思った。

「同盟の件は…私は黙秘させていただきます」
愛奈の言葉に間が論を成した。
「愛奈様、ご自分の国の事なのですよ」
「分かっています。だからといって、私が口を出す事ではないでしょう」
「つまり愛奈、貴方は賛成ではないと言う事ですね？」
愛奈は無言で頷く。
「もちろん、他国と仲がよくなる事に越したことはありません。しかし、また戦になりかねないではないですか」
そこで、会議室にいた人達は皆さ口を閉ざした。

「なん……」
美夜は息をするのを忘れるくらい、驚いた。
それは、沙菜(さな)が泣きながら告げた。
「さ…な…それは…本当なのか……」
呼吸がうまくできない…
足がふらふらする…
「っ…て…！私だって反対しましたっ…！！でも…秋王は……っ！！」
沙菜は感情を抑えきれない。
「では……では、この国に愛奈様以外の……」
沙菜が告げた事…
それは———

「秋王が他国から二人の王妃を貰う———」

第二章

美夜は頭の中が真っ白になった。
考えられない…
「美夜…っ！どうしましょう！？どうしたら…」
どうしようもない…
それは百も承知だ。
でも、どうにかしたい。
――――なぜ――――？
――――――秋王――――――
――――愛奈への裏切り？
信じられない…
美夜は考えた事もなかった。
秋王が愛奈媛以外を迎えるなんて…
ならば……？
美夜の脳裏に一つの嫌な考えが浮かんだ。
ならば、愛奈媛や和奈姫の地位はどうなってしまうのだろう？
実際、美夜は愛奈と秋の関係を知らない。
否、不明。
ただ、愛奈と和奈は姉妹である。
恐いのは、彼女達の地位。
現在、姫の地位にある二人はどうなってしまうのだろう。
美夜は、考えた。
ただひたすら考えた。
そして、出た結論…
――愛奈は知っているの？――
美夜は会議室へと向かおうとした。
「美夜っ！！」
後ろから沙菜に呼び止められる。

「何…？」
「愛奈媛に…言うの…？」
美夜は振り返らず言った。
「ああ……」
そうして、沙菜を見ずに走った。

美夜が全てを話した後、愛奈は静かに微笑んだ。
「そうですか…」
「なぜそんなにも落ち着いていられるのですか！？」
今、美夜は正式な着物を着ている。
その着物を乱しながらも美夜は講義した。
「何を怒っているのですか？おめでたい事ではありませんか」
「媛は…ご存じだったのですか…？」
愛奈は首を横に振った。
「初耳です」
「驚かれないのですね…」
しばらく、沈黙が続いた。その後で、愛奈は語り始めた。
「なぜ、美夜は私と王が結婚すると思ったのですか？」
「何故って…それは…」
「媛だから…？」
愛奈は美夜の言葉を奪った。
「そう…お話しましょう…私と王の関係を」
美夜は顔を上げる。
「私は実のところ媛などと言える立場ではないのです…」
「え……」
美夜には意味が分からなかった。
「ただ…ただの気まぐれ…そうです……」

次の言葉を美夜は待った。
「王の気まぐれで私は拾われたのです」
「何を……」
何を言っている…？
「私は没落貴族の端くれ……」
愛奈は重い口を開いた。

十二年前――
一つの家が火事により消滅した。
原因は、放火。
愛奈の本名は「満（まん）　愛奈」
愛奈の家系、満家は没落貴族の中では裕福な方だった。
しかし、満家を憎む者の手によって消滅させられた。
満家は愛奈のように不思議な力を持った人間が沢山王宮へ送り込んでいた。
それゆえ、王家とは関係が深かった。
だから、邪魔者を廃除しようと満家の血を滅ぼそうとした。
しかし愛奈は自らの能力により命を救われた。
当時、四歳だった愛奈は命からがら逃げた。
満家が火事で焼けたと聞いた秋の父はすぐさま現場へ向かった。
『放火か…ひどいな…』
『王っ！！』
その時、秋の父に仕えていた男、蹂の父は予想外のことを口走る。
『娘がいませんね…』
『遺体が発見されなかったと…？』
『はい』
すると、一人の女性が王、と呼んだ。

『何だ、綵(あや)』
『和奈が…また言いました』
『何をだ？』
『愛奈は王宮近くの洞窟にいる…と』
綵は華麗にも、鮮やかな笑みを浮かべた。
『ふむ…』
王はしばらく考えた後によし、と手を叩いた。
『秋に確かめてもらうとするか』

『秋様、こちらです！』
一人の兵士が松明を持ち、洞窟を照らした。
当時ハ歳だった秋は、子供ながらもしっかり者であった。
『女童はいるか…？』
すると、しばらくして返事が返ってきた。
『居ました！確かに満家の娘子です！！』
愛奈はその時の事を覚えていなかった。
後から聞いた秋の話しでは寝ていたらしい。

『父上、女童(めのわらわ)はどうなさるのですか？』
秋は父に向かい尋ねていた。
『そうだな…どこかの貴族に養子にでもやるか…』
『ならば父上、愛奈を私の妹として…名目上だけ妹、和奈の姉、と言うのはいかがでしょうか』
すると王は困ったような顔になった。
『秋、王家に養子はまずい。せめて、大きくなったら女官くらいに

はなれるだろうが…』
秋はその言葉に納得できなかったのか、腰の刀に手をかける。
『おいおい…物騒な真似はよせ』
『父上がご了承なさいませんなら、物騒なことになります』
カチャ…
刀が鳴る。
『なぜ秋はそこまであの娘子に気をかけるのだ？まさか惚れたか？』
『お黙りください』
『分かった分かった…了承しよう。だが、名目上は和奈の姉だ。お前とは血の繋がりはない。分かったな』
王は鋭い目で言った。
『分かりました』
秋は冷たく笑った。
秋が去った後、王は右手を額に押し付け天上を仰いだ。
『はは…秋も俺と同じだな…』
『何かおっしゃいましたか？』
『わっ！？』
いつの間にか綵が後にいた。
『秋が我が儘でこまっている…』
王は妻に向かって言った。
『あら。私も元々は没落貴族ですが』
綵は呆れたように言った。
『だから、俺と似ていると言っただろう？』
『容姿は私に似ておりますけど』
綵は自信満々に言った。
『俺は別にお前の美しさに惚れた訳ではないぞ。気の強さに惚れたのだ』
そう、綵はこの国で一・二を争うほど綺麗にして、華麗だ。
綵の長い黒髪が揺れた。
『嫌味に聞こえましてよ…』

綵がきつい目で言った。
王は小さく笑った。
『そういう所が好きなのだよ』

『あの…母様は…？』
愛奈は侍女に尋ねていた。
『……』
愛糯は王宮で恐怖を抱いた。
女達の目が冷たい。
没落貴族がいきなり王族にまで成り上がるなどあってはならないだろう。
『あの……』
愛奈は一人の侍女に触れた。
すると、頬に熱を感じた。
『いた…っ…』
叩かれたと気付くのにしばらく時間がかかった。
『気安く触るんじゃないよ！！』
その侍女叫んだ。
すると…
『貴様、今愛奈に何をした？』
冷たい声が飛んだ。
『あ…秋様……』
女は青ざめた。
『秋…様』
秋は女をきつく睨むと侍女は去って行った。
『秋様』
愛奈は安心したように秋を見上げた。
『大丈夫か？』

『はい…』
差し出された手を取った。
『お前はこの国の皇女だ。そして、私は皇子だ。私に迷惑をかけるな。だから、凛としていろ』
『あ…はい…』

それが全てだった。

第三章

「……」
重たい沈黙が続いた。
「失礼します…」
耐え切れなくなった美夜は部屋を飛び出した。
ふと外を見るともう日は深く沈んでいた。
目を細め、疎ましいと思った。
夜は嫌いだ…
美夜は独りごちた。
昔もよく言った。
国に預けられてからは武士の寮のような所に預けられた。
その際、夜は一人だった。
そのせいなのか…
妙に夜が恐いのだ。
今は愛奈の側に仕えているため、自分の屋敷は使いに任せている。
だが、自分の家を持つ前は国の寮で一人で寝た。
親から何も聞かされず預けられた。
親から捨てられた思っている美夜はにとっては拷問だった。
美夜には兄弟がいた。
妹が一人。
妹は両親から愛されていた。しかし、妹ではなく長女である自分を捨てたのはなぜか…
幾度も考えた。答えは出なかった。
たた、親が自分を捨てたという事実がますます事実として為っただけだった。
そんなことを考えていると、秋に会いに行く気さえ失せた。
渡り廊下の真ん中で足を止め、月を見ていた。
嫌になった。

もう嫌だ。
美夜は自室へと足を向けた。

「美夜様っ！？」
愛奈付きの侍女が美夜の姿を確認すると驚きの声を上げた。
「どうしたのですか？」
そんな侍女をよそに自室に入り襖を勢いよく開けた。
そこには、もう使われなくなった刀。それと、絹で大切に包まれた軍の着物。
美夜は思い切り絹を引っ張った。中からバサバサと着物が降ってくる。
それを無造作に引っ張り上げ、目を細める。
二度と着る事はないと思っていた。まさか、王との約束を破ろうとは…
美夜は自分の着物を脱いだ。シンプルな花柄の小袖を部屋の隅に放った。
そして、緋色の軍服を羽織った。
軍服といっても至って普通の着物である。しかし、左腕には袖がない。弓を引く際、邪魔になるからである。
戦前に出る場合は鎧を付けることもあるが、大体は付けない事が常だった。
だがそれは美夜に限る事であり、七瀬や優実は常に鎧を着用していた。
美夜はゆっくりと腰に刀をさす。
そうして勢いよく城を飛び出した。
馬小屋に全力で駆けてゆくと、自分の愛馬、朱の首にしがみついた。
すると、朱は軽く首を振った。その首をなでてやり、手綱をつけた。
朱にまたがり思い切り脇腹を蹴った。

朱はのけ反り、勢いよく馬小屋を飛び出した。
向かう先は、実家。
今は七瀬が預かっている美夜の家。
使いが数人いるものの、主がいなければ成り立たない。そこで、白羽の矢が立ったのが七瀬だった。
暗い夜道を漆黒の馬が駆けて行く。
そうして着いた一ヶ月ぶりの我が家は懐かしい匂いがした。
すると、一人の侍女がかなり驚いた顔で駆け寄って来た。
彼女の名前は、淦理（アカリ）。
素直で愛らしい女性だ。
「お屋形様っ！？」
「あぁ…淦理…久しぶりだな…」
そう言いながら彼女に手綱を渡した。
何故、と聞きたそうな顔をしていたが、あえて淦理は聞かなかった。
「美夜様！」
表を上がった時に奥からもう一人の使いが来た。
「一体どうなさったのですか！？」
「何でもない…しばらく一人にしてはくれないか…？」
彼女は困ったような顔をした。
しかし、それさえも無視して自室へ向かった。
美夜の苛立ちは限界に達していた。
そっと襖を開けるとなぜか涙が溢れて来た。後ろ手に襖を閉めるとそのままへたり込んだ。
暗い部屋に明かりはない。ただ、美夜の涙が落ちる音だけが在った。
しばらくして目が暗闇に慣れたせいか、部屋の様子ががよく見える。
ぼんやりとしたまま、襖にもたれ掛かっていた。
すると、廊下での動きが変わった。
「美夜様がお帰りになったようなのですが…」
戸惑う声の主は淦理だ。
少しだけ、頭を持ち上げて耳を傾けた。

「美夜が…！？でもあの子…」
七瀬の戸惑いの声が廊下から聞こえて来た。
しばらく沈黙が続いた後、襖の反対側から七瀬の声が聞こえた。
「美夜…？」
返事はしない。
黙って聞く。
「大丈夫？一体どうしたって言うの…？」
「もう…分からない…」
「…入るよ、美夜」
七瀬はそう言って襖を開けた。美夜は机に伏せっていた。
「七瀬…私、禁忌を犯す…」

第四章（前書き）

久し振りです…
ここから先は暫く昔語りになると思います。

第四章

「美弥ーっ！！」
名前を呼ばれて振り向いた彼女は、同僚の優実と視線をぶつけた。
「なに？」
「機嫌悪いねー。まぁいつもの事か」
そう言って、一枚の紙を渡す。
訝しげにそれを見遣るが、そのまま颯爽と歩き出す。
優実には目もくれず。
十二の美弥は心が凍てついていた。
親に売られたこの身を疎ましいと思っていたからだ。
物心ついた時にはもう護衛としての教養をされていた。
友など邪魔なだけの存在。いつ死ぬか分からない自分にはそれが一番いいと思う
から。
美弥はもう一度紙を見直すと、愛奈の部屋に足を運ぶ。
「失礼します」
一言だけ声をかけると、部屋の襖を開けた。
すると、中では秋が愛奈に色々な装飾品を並べて見せていた。
「あら。美弥、意外に早かったわね」
愛奈は翡翠の首飾りを秋に返すと、美弥を見据えて言った。
「お邪魔でしたか？…というか、意外って何ですか」
すかさず突っ込みを入れる美弥に構わず、秋は何かを放ってよこした。
危うく落としそうになったが、辛うじて掴む。
「これは？」
「黄水晶だ。守りにしておけ」
美弥は渡された物をよく見る。
全体的に薄みがかった黄色で、透明に近い。雫のような加工がして

ある。上方に
紐が通してあるので、首に掛ける物かと思われた。
「…で。これを渡すために私を呼んだのですか？」
半ば呆れ顔になった美弥は愛奈に装飾品を返す。
「必要ないです。私にはそんな気休め、必要ありません」
さっと踵を返すと、再び襖に手をかけた。
すると、それを愛奈が止める。
「待ちなさい」
美弥はすっと目を細め、半ば愛奈を睨む。
しかし、彼女は完全にそれを黙殺して美弥の髪に手を伸ばす。高く結った美弥の
黒髪が揺れる。
「これは命です。従いなさい。あなたを正しい道へと導いてくれますように」
髪の結い紐に黄水晶をくくり付けた。
「……有り難く頂戴致します」
長い髪を靡かせて美弥はさっさと退室した。
「悩み事だ」
秋は深くため息をつく。だが、愛奈は大丈夫ですよと言った。
「美弥にも大切な人が現れるでしょう」
「それはお前の願いか？それとも先見か？」
秋が優しく、ゆっくりと問と愛奈は小さく微笑んで言った。
「どちらでもありますわ。ただ、事実でもあります。それは…秋王、あなたが与
えるものです」

第四章（後書き）

名前変更しました。
読みにくいと言われました。
友達に…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7217e/

紅水晶の戦い

2010年10月9日13時52分発行